

子どもたちに笑顔と未来を



補習と放課後の居場所を提供

NPOカタリバ

「こんにちは」「今日の教室はどうですか」。師走の午後4時、学校の授業を終えた子どもたちが送迎バスに乗って到着した。小学生は教室、中学生は自習室に向かい、勉強をスタートする。職員とボランティアの学習サポーターが勉強を教え、分からないところは質問に答える。

東日本大震災で、住居倒壊率8割という甚大な被害を受けた宮城県女川町。震災前は女川一小として使われていた校舎に、NPOカタリバが全国からの寄付金などを基に運営するコロポ・スクール「女川向学館」はある。仮設住宅や避難所などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った子どもたちの学習を支援するため、平成23年7月に開校した。町内の小・中学生約200人が通う。

コロポ・スクールは「被災地の放課後学校」という役割を果たす。小学生に国語・算数、中学生に数学・英語・理科・社会の補習授業を行う。授業を受けない日でもスタッフが常駐する自習室で勉強することができる。

子どもたちの心のケアの場、放課後の居場所という機能も持つ。「若く元気な職員やボランティアと話すことで心が落ち着く場所になっている。先生や保護者に言えない悩みを相談する子どもたちも多い」と、職員の松本真理子さんは話す。職員にはカタリバのスタッフと共に、被災して指導の場を失った塾講師を採用した。職員と町内小・中学校、町教委の協力体制も築いた。地域の人たちの協力、全国各地からやって来るボランティアの力もある。松本さんは「さまざまな人が立場を超えて教育の本質を見詰め、子どもたちに関わってきた」と語る。学校以外の学習時間が増えた、意欲を取り戻したなど、女川向学館の取り組みは多くの成果を生んだ。

一方、震災から間もなく2年の今、我慢を続けてきた子どもたちの心理状況の深刻化など、新たな

復興をテーマにキャリア教育

NPO未来図書館

ら方法を考え続けたい」と、松本さんは思いを述べた。他にも、子どもたちに学習の場を提供する団体は多い。塾や予備校で活用できる「学校外教育バウチャー(クーポン)」を発行する(株)チャンス・フォー・チルドレンのような団体もあるなど、それぞれが学習機会の保障に力を尽くす。

震災に長引く不況、将来を描きづらい現在。だが、被災地の子どもたちに未来を描ける場を提供する取り組みもある。

「地元に残ることを悩んでいた自分がはかしく思えた。復興の担い手となるよう頑張っていた」「たっさんの人たちの思いを背負って、自分の仕事を大切にしている話を聞いて感動した」

こんな感想がつけられたのは、岩手県大槌町の県立大槌高校で11月中旬に開かれた「未来パスポート」の授業。きこりや仏師、地元新聞社の記者など、多彩な面々が体育館内にブースを構え、現在の仕事、学生時代の自分を語る。生徒は小グループで話を聞くという、キャリア教育の一環だ。

社会人講師の招集や学校とのやりとりなど、授業をコーディネートするのはNPO「未来図書館」。子どもと社会をつなぐことを目的に、10年度から県内で事業を始動し、震災後は「復興」をテーマに展開してきた。昨年は県内七つの小・中学校で開催した。その手応えを、同法人主任コーディネーターの恒川かおりさんは「若者が将来像を描きづらい今、頑張ったら道が開ける人も、かなわない人もいる、両方が真実。そうした中、多様な価値観と出合える場になっている」と語る。「大人にとって、自分の生き方を振り返ることで学び、元気になろう」と。県内では企業の倒産や業務の見直しを余儀なくされ、高校生の地元就職の選択肢が縮小している。一方で、県外・海外から、たくさ